

中学、高校、大学における運動部活動適応感と 個人・環境要因との関係に関する研究

須崎 康臣*

池本 雄基**

抄 録

本研究は、運動部活動に所属する中学生、高校生、大学生を対象に、個人要因と環境要因が運動部活動適応感に及ぼす影響について検討することを目的とした。本研究は、中学生 166 名、高校生 202 名、大学生 307 名を対象に調査を行った。まず、個人要因である運動部活動における活動への積極性尺度と組織市民行動尺度の作成を行った。活動への積極性尺度と組織市民行動尺度の因子構造を確認するために、探索的因子分析を行った。その結果、活動への積極性は 1 因子構造であった。組織市民行動尺度は「チームへのコミットメント行動」「環境維持行動」「チームメイトへの援助行動」の 3 因子構造であることが確かめられた。これらの尺度の信頼性を α 係数から検討したところ、 α 係数は.83-.92 の範囲で値を示していた。また、これらの尺度の妥当性を検討するために「運動部活動に対する満足感」との相関係数を算出した。その結果、 $r=.32-.55$ ($p<.05$) の範囲を示していた。このことから、活動への積極性尺度と組織市民行動尺度の信頼性と妥当性は、概ね満足のできる値を示していた。次に、運動部活動における個人要因である活動への積極性および組織市民行動と環境要因である環境に対する満足感が部活動適応感に及ぼす影響について検討した。その結果、活動への積極性 ($\beta=.44, p=.05$)、チームメイトへの援助行動 ($\beta=.14, p=.05$)、練習設備への満足感 ($\beta=.20, p=.05$) と、指導者・コーチとの関係の満足感 ($\beta=.10, p=.05$) が部活動適応感 ($R^2=.45$) に有意な正の影響を及ぼしていた。このことから、運動部活動内での行動だけではなく、指導者や練習設備と環境に対する満足感が運動部活動適応感を促す可能性が示唆された。

キーワード：居場所，組織市民行動，環境への満足感

* 九州大学基幹教育院 〒816-8580 福岡県春日市春日公園 6 丁目 1 番地 C-cube712

** 九州大学大学院人間環境学府 〒816-8580 福岡県春日市春日公園 6 丁目 1 番地キャンパスライフ・健康支援センター

Relationship of adjustment to athletic clubs at junior high school, high school, and university with personal and environmental factors

Yasuo Susaki *

Yuki Ikemoto**

Abstract

The purpose of this study was to examine the effect of personal and environmental factors on adjustment to school athletic clubs at the junior high school, high school, and university level. Junior high school students (N=166), high school students (N=202), and university students (N=307) completed a questionnaire. The results of an exploratory factor analysis indicated a one-factor structure for the commitment to club scale and a three-factor structure for organizational citizenship behavior. The three factors were “helping the club,” “environmental arrangement,” and “helping teammates.” These scales had adequate reliability (α coefficients were .83–.92) and validity (correlation to satisfaction with club: $r=.32-.55$). A multiple regression analysis was conducted to examine the relationships among adjustment to school athletic club, personal factors, and environmental factors. The results showed that commitment to the club, helping teammates, satisfaction with practice facilities, and satisfaction regarding the relationship with the coach were positively related to the adjustment to school athletic clubs. These results suggest ways to enhance students’ adjustment to school athletic clubs.

Key Words : sense of belonging, organizational citizenship behavior,
satisfaction with the environment

* Faculty of arts and science, Kyushu university, 6-1 Kasuga-koen, Kasuga-city, Fukuoka 816-8580

** Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, 6-1 Kasuga-koen,
Kasuga-city, Fukuoka 816-8580

1. はじめに

部活動では、興味のある課題に対して活動を行い、その過程で様々な人との交流が行われる場の一つである。このような経験が得られる部活動は充実した学校生活と関連することが考えられる。そして、運動部活動と学校生活との関係が検討されており、運動部活動適応感が学校適応感を高めることが報告されている(青木, 2003, 2004; 村松・日下部, 2014)。そのため、充実した学校生活を送るための支援の一つとして運動部活動適応感を高めることが有効だと考えられる。そのため、運動部活動適応感に影響を及ぼす要因として、個人要因と環境要因を設定し、これらが運動部活動適応感に及ぼす影響について検討することは重要なことである。

なお、本研究では、個人要因を運動部活動での個人の行動とし、環境要因を環境に対する満足感と設定した。また、運動部活動での個人の行動は、運動部活動での練習といった活動への積極性と組織運営や他者へのサポートといった行動(以下、「組織市民行動」とする)を想定した。組織市民行動とは「チームのメンバーとしてチームを効果的に機能させるために求められる行動」(河津ほか, 2012)のことである。Aoyagi et al. (2008) は、組織市民行動がリーダーシップ、選手の満足感、チームの凝集性と正の関係を有することを報告している。また、河津ほか(2012)は、組織市民行動と集団自己効力感と正の関係にあることを明らかにしている。さらに、須崎・杉山(2017)は、部活動における主体的な行動とされる自己調整学習が、運動部活動適応感に正の影響を及ぼすことを報告している。このように、運動部活動における活動に対する直接的な行動や間接的な行動は、運動部活動適応感を高めることが考えられる。

また、環境要因に関して、文部科学省(1997)は、中学生と高校生が運動部活動で抱える問題点として、活動時間、指導者と活動場所といったことを上位に挙げている。そこで、本研究では、文部科学省(1997)の知見に基づき、環境要因を練習頻度、練習時間、練習場所、練習設備、指導者・コーチとの関係と位置づけた。

2. 目的

以上のことから、本研究は、運動部活動に所属する生徒・学生を対象に、個人要因である運動部活動での個人の行動に関する尺度を作成し、個人要因と環境要因が運動部活動適応感に及ぼす影響について検討する

ことを目的とする(図1)。

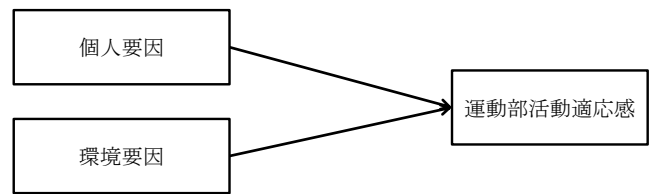


図1 本研究の仮説モデル

3. 方法

3.1. 調査対象

運動部活動に所属する中学生166名(男子95名、女子71名、13.43±.50歳)、高校生202名(男子123名、女子79名、16.33±.47歳)、大学生307名(男子218名、女子89名、18.79±1.53歳)の計675名を分析対象者とした。

3.2. 手続き

調査は、授業時もしくはHR時に集合法で行った。調査に際して、調査の目的、個人情報の守秘の誓約、回答は任意であること、得られたデータは研究以外の目的で使用しないことを文章と口頭で説明を行い、同意の得られた者から回答を得た。なお、本研究は、九州大学大学院人間環境学研究院健康・スポーツ科学講座倫理委員会の承認(201703)を得て、実施された。

3.3. 調査内容

3.3.1. 活動への積極性

部活動内における活動への積極性は、先行研究(岡田, 2009; 須崎ほか, 2017; 渡辺・大重, 2011)を参考に項目を収集した。項目数は、5項目であった。回答は、「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、部活動での活動に対する積極性が高いことを意味する。

3.3.2. 組織市民行動

部活動内における組織市民行動は、先行研究(河津ほか, 2012; 岡田, 2009; 渡辺・大重, 2011)を参考に項目を収集した。項目数は15項目であった。回答は、「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、部活動内での組織市民行動に頻度が高いことを意味する。

3.3.3. 環境に対する満足感

環境に対する満足感は、練習頻度、1日の練習時間、練習場所、練習設備、指導者・コーチとの関係に対してどの程度満足感を得ているかを調べるものである。

回答は、「かなり満足している」から「全く満足していない」の4件法で回答を求めた。得点が高いほど、環境に対する満足度が高いことを示す。

3. 3. 4. 運動部活動適応感

桂・中込(1990)が作成した総括的運動部活動適応感を用いた。これは、2項目から構成されており、運動部活動の適応感を総括的に捉えるものである。得点が高いほど、運動部活動適応感が高いことを示す。

3. 3. 5. 運動部活動に対する満足感

運動部活動に対する満足感は、「部活動には満足している」の1項目で回答を求めた。回答は、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法であった。得点が高いほど、運動部活動に対する満足感が高いことを意味する。

3. 4. 統計処理

まず、作成した活動への積極性と組織市民行動尺度の因子構造を探索的に確認するために、探索的因子分析(重み付最小二乗法・プロマックス法)を行った。次に、これらの尺度の信頼性を検討するために、 α 係数を算出した。さらに、従属変数を運動部活動適応感、独立変数を活動への積極性、組織市民行動、環境に対する満足感を独立変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。独立変数から従属変数の関係は、標準偏回帰係数(β)と決定係数(R^2)を算出した。なお、有意水準は5%未満とした。分析ソフトは、SPSS(Ver19.0)を用いた。

4. 結果及び考察

まず、個人要因である活動への積極性尺度と組織市民行動尺度の因子構造を確認するために、探索的因子分析を行った。分析の結果、活動への積極性は1因子構造を示していた(表1)。組織市民行動は、3因子構造であることが確かめられた(表2)。組織市民行動の因子1は、「部に対する自分の意見を伝えようとしている」といった項目から構成されており、チームへのコミットメント行動と命名した。因子2は、「練習に向けての道具などの準備を自発的にしている」といった項目から構成されており、環境維持行動と命名した。因子3は、「部の人々がミスをして、前向きな言葉をかける」といった項目から構成されており、チームメイトへの援助行動と命名した。

各尺度の信頼性と妥当性を検討するために、信頼性はクロンバックの α 係数を算出し、妥当性は多尺度との併存的妥当性から検討した。各尺度の α 係数を算出した結果、活動への積極性は $\alpha=.92$ 、組織市民行動の

下位尺度は $\alpha=.83-.89$ を示していた。各尺度の妥当性を検討するために、運動部活動に対する満足感との相関係数を算出した。その結果、活動への積極性は $r=.55$ ($p<.05$)、チームへのコミットメント行動は $r=.41$ ($p<.05$)、環境維持行動は $r=.32$ ($p<.05$)、チームメイトへの援助行動は $r=.46$ ($p<.05$)を示していた。Aoyagi et al. (2008)は、組織市民行動と満足感と中程度の相関係数を示しており、本研究も同様の結果を示していた。このことから、活動への積極性尺度と組織市民行動尺度の信頼性と妥当性は概ね満足のできる値を示しており、一定の信頼性と妥当性を有していることが考えられる。

次に、個人要因と環境要因が運動部活動適応感に及ぼす影響について重回帰分析を用いて検討した。その結果、活動への積極性($\beta=.44$, $p<.05$)とチームメイトへの援助行動($\beta=.14$, $p<.05$)、練習頻度への満足感($\beta=.20$, $p<.05$)、指導者・コーチとの関係への満足感($\beta=.10$, $p<.05$)が運動部活動適応感($R^2=.45$)に正の影響を及ぼしていた(図2)。

個人要因において、活動の積極性は運動部活動適応感に正の影響を及ぼしていた。須崎・杉山(2017)は、主体的な学習行動である自己調整学習方略の使用が、運動部活動適応感に正の影響を及ぼすことを報告している。このことから、生徒・学生が運動部活動での活動に積極的に取り組むことで、運動部活動適応感を促す可能性が考えられる。

また、チームメイトへの援助行動が運動部活動適応感に正の影響を及ぼしていた。尼崎・清水(2009)と雨宮ほか(2013)は、運動部活動内における社会的スキルは運動部活動適応感に正の影響を及ぼすことを報告している。つまり、運動部活内でチームメイトに対する援助行動を行うが、良好な対人関係の構築を促し、運動部活での適応感を得ていることが考えられる。このことから、チームメイトへの援助行動は部活動適応感を高める可能性が推察される。

しかし、チームメイトへの援助行動の標準偏回帰係数は、活動への積極性に比べて低い値を示していた。オーガンほか(2006)は、組織市民行動は直接的に組織のパフォーマンスに寄与することはないが、この行動の蓄積が組織の機能やパフォーマンスに寄与することを指摘している。そのため、チームメイトへの援助行動といった組織市民行動は、その行動の積み重ねによって効果を発揮するために、運動部活動に対する標準偏回帰係数は活動への積極性より低い値を示したと考えられる。

環境要因において指導者・コーチとの関係の満足感

は運動部活動適応感に正の影響を及ぼしていた。渡辺・大重 (2011) は、部活動の指導者の技術や規範の指導や人間関係といったリーダーシップが部活動への満足感を高める機能を有していることを報告している。このことから、生徒・学生が運動部活動での適応感を得るには、運動部活動の指導者と適切な関係を構築していることが重要であると考えられる。

また、練習設備の満足感が運動部活動適応感に正の影響を及ぼすことが確かめられた。これは、運動部活動で活動を行うのに満足のできる練習設備を有することが、運動部活動適応感を規定することが考えられる。

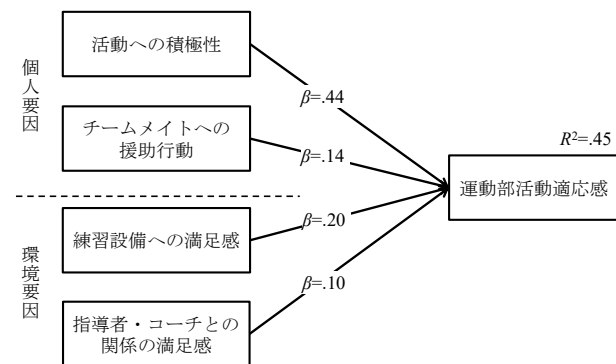
以上のことから、運動部活動適応感を促すには、生徒・学生が運動部活動内での行動に対する指導を行うだけでなく、教師との関係性の構築や練習設備への支援を行っていくことが重要であることが示唆される。

表1 活動への積極性の探索的因子分析結果

	因子負荷量
部活動では積極的に練習している	.90
練習に対して一生懸命に取り組んでいる	.87
自発的に練習に取り組んでいる	.83
部活動に打ち込んでいる	.83
部活動には自主的に参加している	.75

表2 組織市民行動の探索的因子分析結果

	因子負荷量		
	因子1	因子2	因子3
因子1: チームへのコミットメント行動			
部のためなら、リスクを恐れずに意見を言うようにしている	.93	.01	-.15
部に対する自分の意見を伝えようとしている	.75	-.14	.16
改善点などを、積極的に伝えている	.74	.12	-.03
部活動の話し合いには積極的に参加している	.66	.02	.15
互いの練習内容に関して意見を言いあえる	.59	.03	.23
因子2: 環境維持行動			
練習に向けての道具などの準備を自発的にしている	.06	.80	.07
練習場所の準備を率先して行っている	.14	.80	-.09
練習に使った道具の片づけを積極的に行っている	-.12	.80	.14
練習の終わりに、練習場所の掃除を率先して行う	-.04	.75	-.07
因子3: チームメイトへの援助行動			
部の人ミスをしたとしても、前向きな言葉をかける	-.01	-.03	.77
落ち込んでいる部の人がいるときは、励ましている	.07	-.01	.76
部の人困っていたとき、手助けをする	.06	.09	.72
因子間相関	因子2	.61	.73
	因子3	-	.62



5%水準で有意な標準化偏回帰係数のみを示す

図2 重回帰分析の結果

5. まとめ

本研究は、運動部活動における個人要因と環境要因が運動部活動適応感に及ぼす影響について検討することを目的とした。その結果、運動部活動内での個人の行動が運動部活動適応感を規定するだけでなく、その環境に対する満足感も運動部活動適応感との関係性が確かめられた。

【参考文献】

尼崎光洋・清水安夫 (2009) 高校運動部員の集団効力感と部活動適応感及び社会的スキルとの関係：学年別による多重指標モデルの比較検討, *Obirin today : 教育の現場から*, 9 : 165-173.

雨宮怜・上野雄己・清水安夫 (2013) 大学生運動部員版部活動適応感尺度の開発—部活動内対人交流場面におけるソーシャルスキルとの関連性の検討—, *学校メンタルヘルス*, 16 : 170-181.

青木邦男 (2003) 高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因, *体育学研究*, 48 : 207-223.

青木邦男 (2004) 高校運動部員の充実感変化に関連する要因の共分散構造分析, *山口県立大学社会福祉学部紀要*, 10 : 113-128.

Aoyagi, M. W., Cox, R. H., & McGuire, R. T. (2008) Organizational citizenship behavior in sport: Relationships with leadership, team cohesion, and athlete satisfaction. *Journal of applied support psychology*, 20: 25-41.

桂和仁・中込四郎 (1990) 運動部活動における適応感を規定する要因, *体育学研究*, 35 : 173-185.

河津慶太・杉山佳生・中須賀巧 (2012) スポーツチームにおける組織市民行動、チームメンタルモデルとパフォーマンスの関係の検討—大学生球技スポーツ競技者を対象として—, *スポーツパフォーマンス研究*, 4 : 117-134.

文部科学省 (1997) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告 (中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001/toushin/971201

村松宏馬・日下部典子 (2014) 部活動適応感が学校適応感に及ぼす影響, *福山大学こころの健康相談室紀要*, 8 : 83-91.

岡田有司 (2009) 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響, *教育心理学研究*, 57, 419-431.

- オーガン・ボザコフ・マッケンジー : 上田泰訳 (2006)
組織市民行動, 白桃書房.
- 須崎康臣・杉山佳生 (2017) 自己調整学習方略が部活動・
サークル適応感に及ぼす影響. 九州スポーツ心理学
研究, 29 : 16-17.
- 須崎康臣・杉山佳生・斉藤篤司 (2017) 大学生における
運動系と文化系の部活動・サークル適応感尺度の開
発. 健康科学, 39 : 89-95.
- 渡辺弥生・大重啓 (2011) 中学生の部活動における顧問
のリーダーシップが学校適応に及ぼす影響について.
法政大学文学部紀要, 62 : 95-112.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したも
のです。

